

平成州紙



おりおりの記

## 私の英国日誌

メリルリンチ日本証券  
代表取締役会長

中山 恒博

既に半世紀の時を経て未だに私の記憶に鮮明に残っているのは、英国の寄宿学校で過ごした3年間である。

南部サセックスの田舎にある小さな全寮制男子小学校。8歳から13歳の生徒数70人余と教師10人位の集団生活である。私は10歳、当時ベルギーに赴任中の父の教育方針でこの学校に入れられた。

そもそも寄宿学校というのは、英国の富裕層が植民地に赴任する際に子供を本国に残し、しっかりした躰、規律、知識を身につけさせるための教育機関であったという。

朝は6時起床、顔を洗ってすぐに朝食、それから昼まで4科目ぐらいの授業がみっちり。昼食の後は必ず全員参加のスポーツ。春はサッカー、夏はクリケット、そして冬はラグビーと相場が決まっている。実力に応じ1軍、2軍、その他と振り分けられ試合。他校との対抗戦も頻繁だった。

この振り分けとは別に、全校生徒は3つのグループ（ハウス）に分けられる。全員が勉強、スポーツ、品行の全ての面で教師から都度の評価を受け、特に良ければプラス1点、2点、とハウスポイントをもらい、逆に悪しき行為は点を失っていく。この点数表が食堂前の大きな壁に、ハウスごと、個人ごとに集計され毎日更新されていた。学期の終わりに勝利したハウスと最大貢献者が表彰される。

日々、どのハウスが総得点でリードしているか、その中で誰が貢献し、誰が足を引っ張っているか

一目瞭然。この点数表を見ながら皆奮い立って勉強、スポーツに励んだものだ。落ちこぼれがいたらハウスの年長者が勉強を教えたり個人指導でスポーツの特訓をすることも。

日本人は私一人だったが、周囲に助けられ真に充実した日々を過ごせたと思っている。しかし苦い思い出もある。

ある時教室で、私の後の席からの私語を先生が私だと勘違いして「ナカヤマ、静かに！」と咎めたので、思わず「私ではなく後ろの人です」と言ってしまった。教室の雰囲気が一気に凍りついた。この事件の後数日間、親しかった友人達ですら口を利いてくれなかった。告げ口をすることは卑劣であり、そういうアンフェアな行為は許さないという不文律は子供の社会でも徹底していた。この時体験した強烈なインパクトは今でも私の価値観の基本になっている。

個人の力を尊重したうえでチームに所属させて競わせ、その中で仲間意識と規律を醸成する。そしてフェアな勝者には榮譽を冠する古き良き英国流教育を今も懐かしく思う。

